

変わりゆく社会と変わりにくいお寺

西 光 義 敞

(龍谷大学教授)

わが国の社会福祉サービスも、施設中心から地域中心の時代へ、大きく転換しようとしているかに見える。公的福祉中心の時代から、民間活力の導入の時代へと、施策の重心も移動しつつあるように思われる。

この重大な転換期に、仏教界はどう対応していけばよいのか、仏教の立場からどう社会福祉を展開すればよいかが、当然、問われることになる。やれノーマライゼーションだ、やれ在宅サービスだ、やれ地域ボランティアの育成だといった声が高くなるにつれて、社会的関心の高い僧侶や仏教徒は、こういう時代的要請にどうこたえるか、考えずにはいられなくなる。あるいは、そんなことは仏教とは関わりのないこと、寺院活動の範囲外のこととして、無関心でいたり、

超然とかまえていることもできる。そしてこの方が圧倒的多数をしめているのが現状であると思われる。どちらがいいのか、どちらが正しいのかさえもわからぬ一人として、とりとめもない寝言をつらねてみたい。

☆

血のめぐりが悪く、新しい状況にすばやく適応する能力を欠く私は、施設中心の福祉から地域中心の福祉へとというあわただしい動きに、にわかにはついていきがたい気がしている。社会福祉は国の財政に依存しすぎてきた、この辺を見直して、国民の自助、近隣社会での互助を励まさねばならぬ、公費をつかうよりもっと民間活力を導入しなければならぬと、一犬ほゆれば万犬これに応ずるがごとき風潮

には、首をかしげたくなっている。だいじなところで、たくみなすりかえが行なわれようとしている気がするのである。

もちろん私とて、国民が自らの住む地域にたいして限らない愛情をいだき、豊かで住みよい地域づくりの主体となることは、基本的に大切なことだと考えている。その意味で、地域福祉の充実・発展を社会福祉の基軸にすえていうという主張には、基本的に大賛成なのである。例えば、占領政策によるいわば上からの主導によって誕生した「社会福祉協議会」が、多くの苦難を経、試行錯誤をくりかえしながら、二十年後に、「住民主体の地域福祉活動」原則を確立したことを、高く評価するものである。したがってこの原則にのっとった社協の社会福祉組織化活動には、大いに期待をよせてきた。

住民が地域福祉活動の主体として目覚め、立ち上がり、連帯し、組織化して、運動の輪を広げていく。その過程のなかで地域社会を破壊し、地域生活を貧困にするものは何かをはっきり見とどけ、地域住民として守るべきものは何か、要求すべき権利と果たすべき義務は何かを自覚し体得して

いくことはすばらしい。その生きたかずかずの活動事例から、私たちは多くのことを学んできた。

しかし、数年前からの、在宅福祉サービスの強調や地域ボランティアの育成は、「住民主体の地域福祉活動」を促進させる方向とは、すこしちがうのではないか。むしろ地域福祉を矮小化させ、その本質を見失わせる方向に動いているのではないか。公的責任を地域住民や民間に転嫁する傾向がつよいのではないかという疑念を、私は容易に消すことができない。

在宅福祉サービスが行きとどくためには、法的、制度的、財的、物的、人的諸資源が、地域住民の福祉ニーズに応じて豊かに整備されていなければならない。その意味で、在宅福祉サービスは施設サービスに劣らず金がかかるはずである。おいおい整備していこうということだろうが、今のところ、積極的な公的施策が展開しているようには、とても私には見えない。むしろ、専門職員をボランティアにおきかえようとする動きがみえる。ホームヘルパーに過重負担がおしつけられている。高齢化社会の急速な到来が声高く叫ばれるわりには、老人福祉のための専門職員が増強さ

れない。福祉事務所のワーカーが、精神障害者を発見しても、その人たちを専門的にケアする体制が地域にほとんど確立されておらず、放置されたままになっている。過疎地では、独居老人、寝たきり老人の激増に反して、かれらを介護する専門職員、専門施設の配置はおろか、若いボランティアさえ求めがたい集落がふえてきている。老人保健法実施の効果ありとの政府側の発表とうらはらに、貧しい老人たちがたちまち保健のでだてを断ちきられて苦しんでいる。あげればきりがいい。

私が悩むのは、このように見えてしまう私の目が、仏教の教える正見や如実知見に反する偏見なのか、如来大悲の光に照らされた「石・かわら・つぶてのごとくなるわれら」としての共感なのか、われながらわからぬことである。

☆

戦後四十年、ことに後半二十年間のわが国の社会変動は、あまりにも急激であった。前近代から近代へ、封建社会から資本主義社会へ、農業社会から工業社会へという基本的な社会構造の変革が、その加速度をつよめてきた結果である。いたるところで指摘されているように、公害、自然破壊、

核戦争の危機、過疎・過密化、核家族化、急速な高齢社会化等々、人類がまだかつて経験したことのない危機的な難問が、私たちの前に立ちはだかっている。まさに、現代を生きる人間の共業というべきである。仏教者といえどもその例外ではありえないことはもちろんであるが、仏教者らしい時代感覚や社会認識はつねに明確にし、積極的に表明していく責任も、おおいにあるのではなからうか。

とくに浄土教徒として、私は末法史観にたち、現代社会を五濁惡世と見る。我執からまぬがれることのできない「煩惱具足の凡夫」としての自覚にたち、「火宅無常の世界」という世相認識を徹底したい。ことに不安と危機にみちた現代社会をもたらした根本原因は、歴史的には西欧近代、思想的には近代思想の根底にひそむ二元分別的思考、単純で楽天的な自我肯定思想、自我にまつわりつく我執への無知、「無明」にあると見る。

仏教の立場から人類の福祉を追求し、社会福祉のよりよきあり方を考えるときにも、この基本的視点を見失ってはならないと自戒している。

そのうえで私は、観念的、高踏的な社会批評家で終らな

いたために、現代社会や現代社会福祉のありようを、仏教の理念により近い世俗的、政治的価値基準に即して考えてみたい。より具体的に言えば、日本国憲法がさし示している理念を、たえず仏教の理念によって批判・検討し、深化させるとともに、その政治の実現をめざすという基本姿勢をとりたい。

当面の社会福祉も地域福祉も、「すべて国民は個人として尊重される」とした憲法の人権視点に立って考えていきたいと思う。日本国憲法は、国家にたいして、国民主権の尊重と、他国との平和的共存の努力とを要求しているもの、いわば内と外とにたいする二重の無我を要求しているものと見たい。さらに言いかえれば、福祉国家と平和国家の同時実現という方向の国づくりをめざし、究極的には仏教の無我思想の国家的実現、あるいは同朋社会の建設を意図するものと見たいのである。

仏教者として基本的にこのような視点に立つとき、憲法がさし示す人権尊重・国民主権・民主主義・戦争放棄・地方自治をつきくずしていくような方向の政治・政策には、批判的態度をとらざるをえないことになる。したがって一

歩を進めて言えば、防衛の名による軍事費の増強や、行財政改革にかこつけた福祉・文教費の削減傾向にたいしては、つよく異議を申し立てずにはおれないのである。

社会福祉や地域福祉を考える場合も、関心領域や実践分野をせまく限定して、せまい枠の中で頑張ったり、悩んだり、あるいは自己満足しているだけでは駄目である。教科書検定問題も、教育改革問題も、靖国神社公式参拝問題も、天皇在位六十年問題も、中国残留孤児問題も、また国家機密法問題もすべて、目に見えないところで複雑微妙にかかわりあいながら、一つにつながった政治現象として見る目をもたねばならない。さらには現象を貫く政治権力の本質を、仏教の智慧と慈悲と平和の本質にてらして批判し、ときには抵抗する行動力をもたねばならないと思う。

☆

たのまれもしないのに、こういう姿勢をあらわに表明することは、いささか勇気のいることである。時代の流れにすなおに順応し、あるいは社会の動向を無批判に、肯定的に先どって動くほうが、ずっと快いことであろう。

けれども、わが身のうちには浄土教がさし示す「欣浄厭

穢」のころがあり、親鸞聖人の申された「世をいとうしるし」「世のいのり」がある。また、「殺生」への罪惡意識を骨のズイからマヒさせられた異常な戦争体験への悔恨と嫌惡があり、敗戦後の解放感と平和憲法をかちとった喜びがある。戦禍によって生命を断たれた内外同朋への追悼と謝念と責任の情がある。そして、生命や個の尊嚴をないがしろにし、支配欲、権力欲につき動かされる人や集団や組織にたいする限らない恐れがある。

近代日本仏教史も、にがく重い教訓をかずかず残している。日本近代化の歩みのなかで、社会の急激な変化に対応し、国策に順じようとする仏教界や仏教徒の懸命の努力が、さまざまになされてきた。が、ふり返ってみれば、「随所に主となる」べき仏教の基本的立場を失って、政治権力のおしすすめる不本意な方向に「随所に流される」結果に終わったことがあまりにも多かった。過ちは二度とくりかえしてはならないのである。

昨今の世の中の移り変わりはまことに激しい。仏教に「諸行無常」と示しているとおりである。と言えは達観できたとような錯覚をおこすが、現代社会は、ただ空模様が変わる

るように「変わる」だけでなく、自分の欲するように「変えよう」とする人間の、個人的、集団的、組織的諸力がぶつかり合い、せめぎ合い、からみ合って「変えられていく」という面がつよい。そのことも含めて「諸行無常」にはちがいないが、社会的人間としては、自分は、社会をなぜ、どの方向に、どのように変えたいのかということにたいして、自覺的行動的でなければならぬと思う。

そのときの根本基準は自らの信奉する仏教の理念に、また直面する社会的、政治的状况については、さしあたり憲法の理念に求めようというのが、いまの私の主張である。そして、当面、憲法理念に反する方向への社会的、政治的、改革についてはきわめて保守的にならざるをえないが、憲法理念の根底にひそむ西欧近代の人間観、自我観の見直しについては、ラディカルに革新的でありたいと思っている。

☆

ところで、ひるがえって仏教者としての自分や、自分が所属する仏教界を顧みるとき、いかに古いカラにとじこもってそこから出られないか、いかに自らを「変える」ことがむずかしいかを痛感するこのごろである。

仏教のものとして意識していること、仏教者として行動しているつもりだが、仏教的でもなんでもない、むしろ反仏教のことがあまりにも多いのではないか。

「最高の智慧」「無上の悟り」「無縁の大慈悲」「不惜身命の菩薩行」「上求菩提下化衆生」等々の内実は、ほとんど観念と言語の世界にのみ残り、心理的、社会的事実としては、祖先崇拜、死者儀礼、現世祈禱、ト占祭祀、習慣行事といった逸脱形態として栄えている。僧侶も世襲というかたちで発心の機会を失い、信者も入信の動機を欠いた檀徒、門徒で構成されている。明治以降の急激な近代化の過程のなかで、次第にぬぎすて破りすて去ってきた前近代の、封建的なものを、仏教界や仏教者が、いちばん最後まで、ぬぎすて破りすることができずにひきずっているのではないだろうか。

例えば、仏教系社会福祉施設は、キリスト教系社会福祉施設にくらべて、前近代の同族経営形態をとっていることが多くはないか。伝統行事や習慣儀式を行なうということ以上に、職員個々の生き方のなかに宗教精神を培うよう配慮されているか。仏教が否定する呪術・祈禱のたぐいを強制して

いないか。精神的自由や社会権を尊重し保障する雰囲気があるか、等々きびしく点検・反省する必要があるような事例をよく耳にする。

寺院は地域に開かれているかと問うとき、地域の事情、宗派の特色、寺院の形態、住職の意識等によって千差万別であり、いちがいに言えないであろうが、檀家には開かれていても地域全体には開かれていないという傾向があるのではなからうか。門をとぎしたきりの寺院、地域住民の生活意識とずれた寺院生活者も少なくないのではなからうか。

寺院生活者の経済基盤が、資本主義的に歪曲された布施経済にあるために、世間知らずになったり、逆に、寺院財産を資本主義的に経営して、「俗よりも俗」と悪評を浴びたりすることになりやすい。

葬式、法事、観光等を主とした活動が収入の中心になるから、そのことに忙殺され、あるいはそのことに自足して、自らの宗教的研鑽は怠りがちになる一方、広く地域問題、社会問題に目を向けにくくなる。

とにかく、寺院生活のなかには、近代・現代を生きる人間の基本的条件である個の自立、自覚をむずかしくするよ

うな深く不気味なメカニズムがはたらいているようだ。

そもそも多くの仏教寺院は、近代以前の農村中心社会に建立され、封建的な檀家制度によって今日までささえられてきた。ところが昨今の急激な社会変化は、農村型共同社会がはるか遠くに去りゆくとともに、急速に、高度な工業社会、情報化社会という未知の社会が形成されつつあることからきている。封建体制がくずれて資本主義社会に転じたのはすでにはるかな昔のこと、その資本主義も発展の極に達し爛熟しきって危機的様相をおびてきたことによる。臨教審答申による行政改革も、地域福祉、在宅ケアの強調もそういう大きな流れから出てきたものである。

短期・中期・長期と複雑な波動を描いて激変する社会と、生活と意識の深層に、あいかわらず古いものをひそませ引きずっている仏教との、途方もなく大きなギャップに驚きをもった自覚がないかぎり、「仏教と地域福祉」のかかわりは本格的なものにならないような気がしている。